

自分らしく遊ぶようになるまでに段階をふんだ幼児

武藤 亜佐子* ・ 石井 宏祐**

A Case Study of a Kindergartener who went through his own unique stages before he started to play in his own way.

Asako MUTO and Kosuke ISHII

【要約】

本研究は、昨年度の研究（石井・武藤，2020）で報告した，強い偏食傾向によって人間関係の発達に心配された幼児が，急速に人間関係を発達させていった事例のその後を報告し，遊びの発達に焦点を当てて家族療法の視点を用いて考察したものである。

本児の遊びの発達には，本児らしい段階的なプロセスがあった。7期に分けられ，年少Ⅰ～Ⅳ期は遊ぶというよりは遊ぶ場というものを学ぶ側面が強く感じられた時期であった。年少Ⅴ期では母親と共に遊び，年中Ⅰ期は「遊び的遊び」と「遊び」が並列する時期であった。年中Ⅱ期は自分らしく遊び始めた時期であることが考察された。

本児は，母親に支えられるとともに，B幼稚園の保育においては，友達と関わり合いながら遊ぶことも，一人で遊ぶことも，遊ばないことも保障された。このような保育環境の下で，自分がしたい遊び，好きな遊びを自分のペースで探索し，段階をふんで自分らしく遊ぶようになることで，安定して幼稚園で過ごすことが可能になったと考えられた。

【キーワード】

遊びの発達 遊びを通した発達 自分らしい遊び 「遊び的遊び」 遊びを支える環境 家族療法

1. 問題と目的

幼稚園は，同年代の子ども達と過ごす集団生活の場である。幼稚園に入園したばかりの子ども達は，家族という温かな環境から離れて，不安や戸惑いを感じながら，新しい環境に身を置くこととなる。

幼稚園生活の中心は遊びであり，新しい環境に適応し，安定して過ごすようになるためには遊びが充実することが不可欠である。遊びが充実するということは，まずは自分が好きな遊び，したい遊びを見つけ，自分が

選んだ遊びで遊びこむことが大事であると考ええる。

幼稚園教育要領（文部科学省，2017）では，「幼児の自発的な活動としての遊びは心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して，遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること」とあり，第2章では，「健康」「人間環境」「環境」「言葉」「表現」すべての領域のねらいが遊びを通して達成されることを想定して書かれている。特に「遊び」の用語が明記されてい

*佐賀大学教育学部附属幼稚園

**佐賀大学教育学部附属教育実践総合センター

るのは、健康領域の内容とその取扱い、人間関係領域の内容、環境領域の内容の取扱い、表現領域の内容の部分である。また指導計画の作成に当たっての留意事項の箇所にも記載されている。

幼稚園教育において、遊びを通した発達の重要性は改めて言うまでもないが、遊びを通した発達は、遊びそのものの発達と互いに密接に関わっていて、相乗効果を成しながら、促進されていくものと考えられる。

本研究は、昨年度の研究（石井・武藤，2020）で報告した、強い偏食傾向によって人間関係の発達が心配された幼児（以下、A児と表記）が、急速に人間関係を発達させていった事例のその後を報告し、遊びの発達に焦点を当てて家族療法の視点をを用いて考察する。

本児の人間関係の発達もまた、遊びを通した発達といえるが、本児の遊びそのものの発達には、本児らしい段階的なプロセスがあった。このプロセスを支援することについて検討することが、本研究の目的である。

家族療法は「良循環に徹底的に関わる」（石井・石井・三谷・長谷川，2005）アプローチであり、対象者が「できるだけ今のまま」（石井，2009）で変化できるように支援しようとするパラドキシカルな特長を有する。

石井・武藤（2020）では、「望ましい変化に伴って、その他の懸念も好転するのではないかと期待したり促したりしてしまう」と、「支援の想いに反して悪循環に陥ってしまうおそれがある」と指摘した。特にA児は、A児の変化を期待する他者の想いに繊細に反応できる子どもである。長所となる持ち味であるが、幼児期にあつては、自分の行動を意図せずに自ら制限してしまうといった形で現れやすい繊細さともいえる。石井（2018）は、家族療法のアプローチを紹介するなかで、「変化を目指すという営みにはどうしても現状の否定が前提になりがち」であるため、「変えようとするのではなく、現状を理解しようとした」ことで子どもを支えた保護者の事例を挙げている。A児もまた、変化を目指す営みに現状の否定を感じやすいと考えられる。

A児の通う幼稚園（以下、B幼稚園と表記）は、子どもの自主性や主体性を重んじて保育を行っている。良循環に関わる家族療法との親和性も高く、幼稚園での支援を考察するために、家族療法の視点を援用することは有益だと考えられる。

2. 事例

以下、石井・武藤（2020）の一部を斜体で抜粋し、その後の経過を報告する。

A児の様子

A児は入園前、人間関係よりも機械の仕組みなどパターン化された事象への関心が高く、電化製品と電源とのつながりや、稼働する設備の音、機器の種類やそれらの役割など、繰り返し話題にしたり確認したりすることが好きな幼児であった。その回数やリズムが満足なものでないときには、行動の切り替えが難しいこともあった。また、偏食傾向が強く、感覚の過敏さもあったことから、母親は3歳児での幼稚園入園後の生活を心配していた。

入園から年少組の2学期までは、母親は幼稚園に残りA児と生活を共にし、A児は母親と一緒に遊びながら、他児との関係を築き、予想を超えたペースで幼稚園生活に適応していった。2学期の終わり頃には、母親がそばにいらなくても遊ぶようになったが、3学期に入ると、母親に幼稚園に残るように求め、降園まで母親のそばから離れずに過ごし、母親以外と会話することがなくなった。年中組に進級すると、再び、他児や保育発達支援員との関係を取り戻し、母親とも離れて幼稚園生活を送るようになった。

B幼稚園の方針

A児の保護者が選んだB幼稚園は、自由保育を方針としている。保護者による送迎が行われており、保護者も子どもと登園し、子どもの望みに応じて寄り添い、降園まで園で過ごすことができる園であった。入園前からA児のペースや自主性・自発性を大切にしてきた母親にとって、B幼稚園の教育方針は賛同できるものであった。時にA児のペースを重んじる母親の方針が、他者から賛同を得にくく、孤立を感じることもあったとしても、園の方針がそれを和らげる支えになったと考えられる。

支援者の連携

第1著者は、B幼稚園に保育発達支援員として勤務し、子ども達と遊びながら、保育上の配慮や支援を必要

とする子ども達の発達的なアセスメントや支援を行っている。必要に応じて担任・副担任へのコンサルテーションや保護者相談を行い、園全体の保育・発達支援に携わっている。公認心理師資格を持つ臨床発達心理士であり、心理専門職としての支援が求められている。

第2著者は、臨床心理学を専門とし家族療法をオリエンテーションにもつ大学教員である。第1著者と連携し、保護者支援を行っており、A児やA児の母親と関わってきた。

B幼稚園の教育目標は、「身近な環境に自らかかわり、遊びを創りだす力を育てる」である。幼児の自発的な遊びを通して成長や発達を遂げていけるような保育を行っている。第1著者も園の教育目標に則って、支援を必要とする園児の集団の中で自ら育つ力を大事に、日々の遊びや生活の中で支援を行っている。

経過の概要

石井・武藤(2020)で、A児の人間関係の急速な発達と食行動のこだわりの関係について報告した。その後、食行動へのこだわりは維持されながら、人間関係の発達に伴い安定すると思われた幼稚園生活においても波がみられた。人間関係の発達においても、変化の波がみられたが、俯瞰してみると幼稚園におけるA児の人間関係は広がりを見せ、幼稚園生活の安定を支える土台となっている。

3. 研究方法

本事例では、母親と保育発達支援員(第1著者)と大学教員(第2著者)が連携しながらA児を支援する過程に焦点をおき事例を整理する。母親の語りと保育発達支援員の支援記録、大学教員の面接記録をもとに、入園してから現在までの、本児の遊びと幼稚園での行動の変化をまとめ、考察を加える。

4. 結果と考察

A児にとって、同年代の子ども達と過ごす集団の場は、初めての経験の連続で、とまどい、不安な気持ちを抱えながらの幼稚園生活の始まりだったと考えられる。

年少時は、A児は母親と共に幼稚園で過ごし、幼稚園

の環境や他者、遊びなどをじっくり観察し、他児がしている遊びや生活習慣に興味を持ち、真似をしてみる様子が見られた。ごっこ遊びや、ブランコや乗り物など、他児がしている遊びを母親と一緒に体験することで、安心感を持って幼稚園で遊ぶようになり、園生活に適応していく姿が見られた。2学期の終わり頃には、母親と離れて遊ぶようになり、気の合う友達と様々な遊びに挑戦し、遊びにおいても人間関係においても広がりを見せた。また、A児が入園前から関心がある物や現象への興味・関心は、家庭での母親との探求から、幼稚園では保育発達支援員との遊びとなり維持された。

年少の3学期は、それまでの姿とは一変し、母親から離れずに遊ぶようになった。登園から降園まで、母親のそばを離れず、ほぼ毎日ブランコに乗り、母親に押してもらい遊びが続いた。他児や保育者が近付くと、母親や保育発達支援員の後ろに隠れ、関わりを拒むような姿が見られた。幼稚園で母親以外と話をしなくなり、保育室に入ることも少なくなり、「行きたくない」という理由で休む日もあった。

年中組に進級すると、保育室の場所、担任・副担任を始め多くの職員が替わり、新たに新入園児も加わり、幼稚園でのA児を取り巻く環境が一変した。4月当初は緊張している様子が見られたが、まもなく、母親から離れて仲の良いC児や保育発達支援員と一緒に遊ぶようになった。2学期になると、登園後まもなく母親から離れて、保育発達支援員や友達と遊び始め、再び、特定の仲の良い友達だけでなく、友達同士で遊ぶようになった。行事についても、園内の行事だけでなく、園外に出かける行事においても母親は付き添うことなく参加するようになった。

遊びと行動の変化

Table1とTable2は、保育発達支援員(第1著者)の支援記録をもとに、A児の遊びと行動の変化についてまとめたものである。

Table1. A児の年少時の様子

A児の様子	遊びの様子・他児との関わり	A児の行動の変化
年少Ⅰ～Ⅳ期（4月～12月）《母親に側にいてもらいながら友達と遊ぶ》		
<p>●1学期は母親に側にいてもらいながら、2学期になると距離を置いて色々な場所で遊ぶようになる。友達からごっこ遊びに誘われ、お客さんや赤ちゃん役になり、友達とのやりとりが増える。年長児や年中児とも関わりを持つ。母親や保育支援員が、すぐそばにいないくても、子ども達だけで遊ぶようになる。</p> <p>2学期の後半には、遊び始めると、母親が離れることに同意し、保育発達支援員と友達と遊ぶようになる。</p> <p>●お弁当は保健室で保育発達支援員と一緒に食べる日が増える。母親と一緒に保育室で食べる日もあるが、他児の動きや声を気にする様子が見られ、緊張が高くなる。母親はA児と一緒に食べる友達からお弁当の片付けや歯磨きの援助を頼まれることが多い。</p> <p>保育発達支援員と保健室で食べる時には、CDデッキを周囲に置いて食べる。他児から、なぜ保健室で食べるのか、手で食べるのかと聞かれることもある。</p>	<p>●友達から誘われごっこ遊びに入る。</p> <p>●落ち葉を集めた落ち葉場で、落ち葉を友達とかけあって遊ぶ。</p> <p>●友達数人とかくれんぼをする。</p> <p>●友達と一緒に三輪車に乗って出かける。タイヤブランコに友達と2人で乗る。</p> <p>●年長児の電車ごっこに母親や保育発達支援員と一緒にいる。</p> <p>●母親と離れた後は、保育発達支援員と一緒に友達との遊びに参加する。A児が好きなCDデッキを職員室を借りに行き、ゆうぎ室や保健室で遊ぶ。CDデッキを並べるだけでなく、人形劇のようにして遊ぶこともある。A児と2人で遊ぶ時には、コンボやスピーカーなどのA児が好きな電化製品や電器屋さんに行った時の話題が多く、楽しそうに話す。</p>	<p>●登園後しばらくは母親と一緒にいるが、保育発達支援員や仲の良いC児と遊び始めると、離れて遊ぶようになる。仲の良いC児と遊びを共にし、ごっこ遊び、三輪車、タイヤブランコの二人乗りなど、パリエーションが増える。</p> <p>●C児や仲の良い友達の言動をよく観察しており、身の回りのものの始末、遊び道具の片付け、着替え、排泄など、園生活の流れに沿った活動を、自ら進んで行うようになる。</p> <p>●職員室の入室ができない時期、職員室に一切近付かなくなる。登園してから保育室にたどりつくまでに時間がかかるようになる。</p>
年少Ⅴ期（1月～3月）《母親から離れずに遊ぶ》		
<p>●登園から降園まで母親に側にいてもらいながら過ごす。時には、母親と一日中手をつなぎ、片時も離れないこともある。ほぼ毎日、母親とブランコで遊ぶ。</p> <p>園では母親以外と話をしなくなる。保育発達支援員が話しかけると、頷いたり、首を振ったりはするが、母親を介して会話をするようになる。他児や他のクラスの先生がが近付くと、母親や保育発達支援員の背中に隠れるようになる。「行きたくない」という理由で欠席することが増える。</p> <p>3月に入り、母親と一緒にC児の後を追いか、ことばや動きを真似するようになる。次第に、母親から離れてC児と保育発達支援員がしている遊びに入るようになる。</p> <p>●お弁当は、朝、母親がA児に確認して持ってくる日が増える。保健室では食べなくなり、3月からは一切食べなくなる。</p>	<p>●ブランコに乗り、母親におしてもら。雨がひどい時にはブランコに乗れないからという理由で欠席する日もある。</p> <p>●A児の母親を慕って集まってきた子ども達と数人でかくれんぼをする。A児の母親とA児が鬼になる。母親が他児を抱っこしながらかくれんぼをすることもある。</p> <p>●久しぶりに、C児が始めた「焼肉キングごっこ」に入る。A児もビールケースを持ってきてフライパンでお肉を焼く。</p>	<p>●A児が母親を独占して遊ぶようになり、保育発達支援員や他児との関わりが減る。結果として、母親が他児と遊ぶことや手伝うことが減る。</p>

年少Ⅰ期～Ⅳ期 年少Ⅳ期までのA児の主な遊びは、ブランコ、三輪車、スクーター、かくれんぼ、おうちごっこであった。幼稚園に入園まもない子ども達は、保育者との信頼関係を築き、緊張感や不安な気持ちを受け止めてもらいながら、同年代の友達の行動を観察し、模倣しながら、興味・関心のあるものや好きな遊びを見つけていく。そして、好きな遊びを通して、他児と触れ合い、関係を築いていく。A児も他児と同じように、遊びに対する興味・関心を広げ、遊びを通して他児との関係を築いていったと思われる。

この時期、A児は他児の行動をよく観察し、模倣し、様々な遊びに挑戦していた。入園まで、同年代の子ども達と遊ぶ機会がほとんどなかったというA児が、友達

と関わりながら様々な遊びに挑戦する姿は驚くものであったが、振り返ってみると、自ら選んだ遊びというよりは、他児から慕われるA児の母親のもとに集まって来た友達から誘われる遊びだったように思う。様々な遊びに挑戦していたが、A児にとって、好きな遊び、したい遊びとは異なっていたのではないかと思われる。遊んでいながらも遊びへの適応を模索するという側面が強い時期だったのではないかと考えられる。遊びこむというよりは、遊びという場にいるということについて学んでいたといえ、いわば「遊び的遊び」ということもできよう。この時期のA児の遊びを、「遊び的遊び」として捉えることは、A児らしい遊びの発達を考察する上で建設的な試みであると考えられる。

Table2. A児の年中時の様子

A児の様子	遊びの様子・他児との関わり	A児の行動の変化
年中Ⅰ期（4月～7月）《友達や保育者の真似をよくするようになる。再び母親がそばにいても遊ぶようになる》		
<p>●登園時の表情が明るくなり、登園してすぐは母親に側にいてもらいながら遊ぶが、母親が育友会（PTA）活動に参加しなければならぬ時は、母親から離れて保育発達支援員と一緒に友だちと遊ぶようになる。保育発達支援員や友だちとよく話すようになる。進級してまもなく、仲の良いC児や新しく担任になったD教諭の言動を模倣する。C児については、後について様々な場面で同じように振る舞い、D教諭については、園児に向かって話す時の口調や仕草、靴の置き方、写真を撮る様子などを模倣する。</p> <p>●気温が高くなってきたため、お弁当を持て来なくなる。</p>	<p>●保育発達支援員や友達とブランコに乗る。</p> <p>●友達と一緒にスクーター、三輪車などの乗り物を押しながら遊ぶ。</p> <p>●C児の鬼ごっこに保育発達支援員と一緒に入る。</p> <p>●保育発達支援員と2人で電源探し、楽器屋さんをする。楽器屋さんで他児が入ってくることは構わないが、A児のペースで遊ぶ。</p> <p>●ブランコ遊びの時に、押しながら、「○○まで飛んでいけ～」と声をかけると、父親の職場、モラージュ、ベスト電器、韓国と色々な場所を言う。友達と行きたい場所を言い合いながら楽しそうに乗る。</p> <p>●お弁当の時間は、保育発達支援員と2人きりで遊ぶ時間となる。三輪車をこぐことに挑戦する。</p> <p>●ダイナミックに水遊びをする。</p>	<p>●仲の良いC児や他児の行動をモデルとして、身の回りのものの始末や片付け、トイレ、着替えなど園生活の流れに沿った行動をするようになる。</p> <p>●D教諭の言動を模倣する。保育発達支援員が休みの日に、D教諭の後について他児との遊びに入る。</p> <p>●C児と保育発達支援員と一緒に遊び始めることが多い。C児の遊びや行動をモニターしながら一緒に遊ぶようになる。</p> <p>●「お茶を買いに行く」、「着替えを取りに行く」などの理由で、母親が園外に出ることに同意する。次第に「家事をする」、「お買い物に行く」などの理由で家に帰ることに同意する。</p> <p>●C児とともにトイレでの排泄が自立しつつあったが、C児が遊ぶと、A児もまったく同じようにふるまう。</p> <p>●年中組から入園した友だちとも遊ぶようになる。ごっこ遊びで使いたい道具を一人で取りに行ったり、友だちに使われそうになった時に「今、使っている」と言うようになる。</p>
年中Ⅱ期（9月～11月）《母親から離れて遊ぶ》		
<p>●登園してしばらくは母親に側にいてもらうが、A児の遊びに母親が加わることはほぼなくなる。A児のしたい遊びをイメージして登園し、保育発達支援員や友達との遊びを楽しむようになる。</p> <p>●お弁当は持ってきていない。他児から誘われることが増える。9月中は「10月になったら」と答えていた。9月末日に「11月になったら」と保育発達支援員に言いに来た。11月に入ると「1月か2月か3月になったら食べる」と答えている。</p>	<p>●C児が始めた「だんご屋さん」の横で「お好み焼き屋さん」を始める。ピールケースを並べて、厨房に見立てて、フライパンやお玉などを準備し「お好み焼き屋さん」ごっこをする。場所が変わったり、一緒に遊ぶメンバーが変わるが、数日間、遊びが継続する。</p> <p>●雨が降った後の水たまりで開放的に遊ぶ。</p> <p>●水遊びで使ったペットボトルのふたを色々なところに投げる。投げてはいけぬ場所（日除けの上・川）の話をするが、保育者の反応を見ながらいたずらをする。</p> <p>●ダイナミックに水遊びをする。コップに水を勢よく出して跳ね返る様子を見たり、ペットボトルのふたがくるくる回る様子を観察する。</p> <p>●保育室にCDデッキを持ってきてままごとコーナーに設置する。配置することを楽しんだり、帰りの会でD教諭がピアノを弾くときに、ピアノの上のCDデッキに見立てて遊ぶ。</p> <p>●好きな絵本のキャラクターをメージした絵を何枚も描く。D教諭から誘われ、製作に取り組む。描いた絵を自分で壁に貼る。</p> <p>●保育発達支援員と友達と一緒に電源ボックス探し、防犯カメラ探しごっこをする。</p> <p>●他児と保育発達支援員とバドミントンをする。</p> <p>●ゆうぎ室で一人でピアノを弾く。</p> <p>●ままごとハウスの周りにピールケースを並べて基地づくりに没頭する。</p> <p>●他児と2人だけで魚捕りの網を借りに行き魚捕りをしようとする。</p>	<p>●A児から母親に「帰っていいよ」と言うことが増える。</p> <p>●ごっこ遊びの際、自分が汲んできた水を使われたことに怒り、「ウーン」と言いながら、力ずくで取り返す。地面に落ちていたコップを蹴り、怒りを表現する。保育発達支援員に「ガストンって知ってる？」と聞く。「ガストンもウーンって怒るんだよ」と言う。</p> <p>●母親は2階にいるか家に帰ってよいか朝確認しているそうだが、「2階」と言っていたのに「帰っていいよ」と言うようになる。</p> <p>●お弁当の時間に、保育室でお茶を飲むようになる。D教諭の話がある時には保育室に入り、話を聞き、お弁当の様子を見る。</p> <p>●登園した時に保育発達支援員が外にいないと、職員室に呼びに来る。</p> <p>●帰りに一列になって藤棚に向かう際、A児はゆっくり歩いていたので後ろの子から背中を押される。「Aちゃんは早くいきたくないんだよ」と相手に伝える。</p> <p>●ブランコに乗っている時に、C児から替わってと言われる。長い時間乗っていたが、大きな声で「Aちゃん、まだ乗ったばかり」と答える。</p> <p>●帰りの片づけの時、職員室から借りてきたCDデッキを返すようにC児から言われ、「いやだ」と反論する。取り上げようとするC児に「自分で返す」と言って、返しに行く。</p>

年少Ⅴ期 Ⅴ期は、A児は他児との遊びを拒み、母親と2人でのブランコ遊びを続けた。Ⅳ期までに、他児と共にしていた遊びをほとんどしなくなり、一日の

大半を母親とブランコ遊びをして過ごした。ブランコ遊びはA児が好きな遊びであり、その遊びを母親とじっくりと楽しみたかったと考えられる。また、他児との

遊びをしなくなったのは、A児が主体的に遊びを選択するために、一旦、他児との関係をリセットし、再び、園生活における遊びの探索を始めたのではないかと推察される。

「遊び的遊び」から母親との遊びへの展開とみなすことができると考えられる。他児と遊ばず、園で母親を独占して遊ぶことは、遊びを通した人間関係の発達という点からは進展したとはいえない。しかしA児の遊びの発達という意味では、重要な段階であると位置づけ、B幼稚園でも尊重していった。

年中Ⅰ期 年少Ⅴ期の終わり頃から年中Ⅰ期には、再び、仲の良いC児の行動やことば、生活習慣をそっくり模倣するようになった。また、年中から担任となったD教諭のこともよく観察し、子ども達に話す時の仕草やことばを模倣していた。ここでの模倣は、見て学ぶような様子であり、遊びの延長線上にある前後のどこかの地点に位置づけられるような様子ではなく、A児らしい「遊び的遊び」のひとつとして理解することが妥当だと考えられた。

何事もよく観察し、納得してから行動するA児が、再び、自分を取り巻く環境を理解し、幼稚園生活に適応し、安心感を持って過ごすために必然的な行動であったと考えられる。

一方、この年中Ⅰ期のA児は、「遊び的遊び」だけでなく、ブランコ、乗り物遊び、鬼ごっこなどの集団遊びや、「電源探し」や「楽器屋さん」をして遊んだ。「電源探し」や「楽器屋さん」は、日頃からA児が関心を寄せている電源や電化製品、楽器を取り入れて、保育発達支援員との遊びにしたものである。「楽器屋さん」は、A児が好きな楽器を好きなようにベンチに並べる遊びであるが、A児が主体的に遊びを始め、他児が加わり、値札を作ったり、お客さんになったりして、ごっこ遊びとして展開していった。

この時期、A児は、幼稚園でお弁当を食べなくなり、その時間は保育発達支援員と2人きりで遊ぶ時間となった。他児のいない園庭をゆっくりと三輪車に乗って回り、A児が好きなブランコを心ゆくまで楽しむことができた。また、A児が心惹かれる職員室のCDデッキや放送機器を借りてきて、他児から干渉されることな

く眺め、ゆうぎ室や保健室に配置したり、水道を独占して水遊びに没頭したりすることができた。幼稚園において信頼できる他者との1対1の関係をしっかりと築くことにより、A児の求めに応じて幼稚園に残ってくださったという母親とは、お弁当の時間の前には、自ら離れるようになった。

母親との遊びから次の遊びに移行するために、準備として模倣という「遊び的遊び」が必要だったと考えられる。また、模倣という「遊び的遊び」と、いわゆる「遊び」が共にみられる時期でもあった。「遊び的遊び」と「遊び」は、互いに完全に独立しているものではないとしても、A児にとっては、この2つはそれぞれ個別にあることが望ましいバランスであったと考えられる。B幼稚園ではどちらも尊重し、関わっていった。

年中Ⅱ期 他児との遊びから取り入れたものを再現したごっこ遊びをするようになった。C児が始めた「だんご屋さん」の隣で始めた「お好み焼き屋さんごっこ」は、日常生活では経験したことのない「お好み焼き屋さん」を開店し、店主になり、お好み焼きをふるまった。A児の創造力も発揮された「お好み焼き屋さんごっこ」は、場所や一緒に遊ぶメンバーが替わりながら、数日間にわたり継続された。片付けの際に、お店を残しておいてほしいと主張するようになり、コーンで囲み、貼る紙を貼って残すことで、自分がしたい遊びをイメージしながら登園するようにもなった。

年中Ⅰ期とは異なり、「遊び的遊び」と「遊び」が明確に区別できなくなっていった時期である。A児が遊びたい遊びを自分らしく展開していて、しかも「遊び的遊び」でバランスをとる必要性も薄れてきたと考えられる。

遊びを支える環境

A児への保育について、幼稚園では個別の配慮が必要と考え、保育発達支援員が保育時の支援を行っている。A児は入園前から、機械の仕組みなどパターン化された事象への関心が高く、電化製品と電源とのつながりや、稼働する設備の音、機器の種類やそれらの役割など、見たり聞いたり確認したりすることが好きであった。幼稚園にある放送機器やCDデッキは、A児にとつ

て非常に魅力的で、それらの機器を見ることや触ることを希求した。入園当初は、登園中のストレスコーピングとも捉えられたが、幼稚園生活においては、A児が主体的に遊ぶために必要な題材と捉え、一人で楽しむものから保育発達支援員と、あるいは友達と一緒に楽しむ遊びとなるよう配慮した。A児にとって、大好きな電化製品や放送機器を使って遊ぶ体験は、A児が、幼稚園は自分が好きなことやしたいことをして遊ぶ場であると実感するために有効であったと考える。

また、母親の教育相談とA児の支援に関する保育発達支援員へのコンサルテーションは、大学と連携して行っている。入園時に懸念された強い偏食についての積極的なアプローチは行わず、急速に変化が見られた人間関係の発達を支える「良循環に徹底的に関わる」（石井・石井・三谷・長谷川，2005）家族療法の視点を持ち、園内カンファレンスで共通理解をはかり、クラス担任・副担任と連携して支援を行っている。

B幼稚園の保育においては、友達と関わり合いながら遊ぶことも、一人で遊ぶことも、遊ばないことも保障されている。このような保育環境の下で、自分がしたい遊び、好きな遊びをA児のペースで探索し、段階をふんで自分らしく遊ぶようになることで、安定して幼稚園で過ごすことが可能になったと考えられる。

5. 総合考察

幼稚園生活の中心は遊びであり、新しい環境に適応し、安定して過ごすようになるためには遊びが充実することが不可欠である。B幼稚園でも子どもたちが遊びこむことができるように、自主性や主体性を重んじ、自分が好きな遊び、したい遊びを見つけ、自分が選んだ遊びで遊びこむことを支援してきた。しかし、A児が自分らしく遊ぶようになるまでには、彼らしい段階をふむ必要があった。年少Ⅰ～Ⅳ期は遊ぶ場というものを学ぶ「遊び的遊び」の時期であり、年少Ⅴ期は母親と共に遊ぶ時期であり、年中Ⅰ期は「遊び的遊び」と「遊び」が並列する時期であり、年中Ⅱ期は自分らしく遊び始めた時期であった。

「遊び」と「遊び的遊び」が一貫して混在し、「遊びの発達」と「遊びを通した発達」が密接に関わりながら発達していくプロセスもあれば、A児のように丁寧に

段階を踏んでいくプロセスもある。A児の母親とB幼稚園は、A児のこのプロセスを尊重してきた。

多くの園児から慕われるA児の母親は、まずA児に遊ぶ場を学ぶ機会を提供し（年少Ⅰ～Ⅳ期）、その後、A児が家庭とは違う場所で遊ぶことができることを支えた（年少Ⅴ期）。次第にA児は、母親と培った「遊び的遊び」でバランスを取ることを、母親がいなくてもできるように（年中Ⅰ期）、自分らしく遊び始めた（年中Ⅱ期）と考えられた。このプロセスを、一貫して母親は支え続けてきたといえる。

一方、B幼稚園の子どもの自主性や主体性を重んじる姿勢は、遊びや行事だけに向けられたものではなかった。母親と遊ぶこと、保育者と遊ぶこと、一人で遊ぶこと、友だちと遊ぶことだけでなく、「遊び的遊び」に没頭することや、遊ばないことにも向けられていた。このような環境の中で、A児は自分らしく遊ぶ前に、自分らしく段階をふめたのだと考えられる。

A児は人間関係の発達や、園生活での変化も富んでいて、つい次の段階への展開を期待させる力を持っている。しかしながら、家族療法の視点からすると、それらの発達や変化をさらに次の段階へと押し上げようとするのではなく、その状態に馴染んでいくのを支えることが良循環に関わることだと考える。「できるだけ今のまま」で発揮できることを尊重し続けていくことで、変化を支えていくというパラドキシカルな考え方である。

変化を目指すことが現状の否定にならないためには、B幼稚園の方針のように、自主性や主体性といった子どもたちのその場その時の変化の芽生えを尊重することが重要だと考えられる。変化を期待するのではなく、子どもたちから湧き出た芽生えを支えるのであり、A児の変化もまた、自主性や主体性を発揮するA児と、それを支えた母親と、B幼稚園の支援によるものだと考えられる。

文献

- 1) 石井宏祐・石井佳世・三谷聖也・長谷川啓三（2005）. インタラクショナル・ビューウを臨床に活かす—短期家族療法のユニークな視点. 現代のエスプリ 456 臨床の語用論 II. 至文堂.

- 2) 石井宏祐 (2009). ブリーフコーチング—子どものリソースに目を向ける. 児童心理 63(1). 金子書房.
- 3) 石井宏祐 (2018). なんでも人のせいにする子との対話. 児童心理 72(2). 金子書房.
- 4) 石井宏祐・石井佳世・松本宏明 (2019). カウンセリングの理論と方法. 長谷川啓三・佐藤宏平・花田里欧子 (編) 事例で学ぶ生徒指導・進路指導・教育相談 中学校・高等学校編 第3版. 遠見書房.
- 5) 石井宏祐・武藤亜佐子 (2020). 人間関係の発達に伴い食行動のこだわりに波がみられた幼児. 佐賀大学教育実践研究 39.
- 6) 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領. フレーベル館.

付記

研究に協力いただいたA児のお母様に心より御礼申し上げます。